

 HOMAS 日本語版 ニュースレター	No. 66 平成 24 年(2012 年) 7 月 31 日発行 北海道・マサチューセッツ協会 会長 森本 正夫
	発行所 〒060-0003 札幌市中央区北 3 条西 7 丁目 道庁別館 12 階 TEL011-231-3392 FAX011-231-3666 発行人 中垣 正史 E-mail homas @ siren.ocn.ne.jp
Hokkaido Massachusetts Society 北海道・マサチューセッツ協会	

北海道開拓の基礎を築いた指導者たち(21)

北海道農業・酪農の基礎を築いた先駆者たちの足跡とその業績

- 大友亀太郎、エドウィン・ダン、町村金弥、宇都宮仙太郎、町村敬貴、黒沢西蔵 -

<原稿が長くなりましたので、2回に分けて掲載します。町村敬貴・黒沢西蔵については、「HOMAS」67号に譲ります。>

まえがき

広大な緑の牧場が広がっていて、そこに牛や馬が放牧されている…これが、北海道の原風景のようなイメージの感があります。しかし、北海道が「酪農王国」に至るまでには、まず、1876年(明治9年)、エドウィン・ダン(1848～1931)が、開拓使の招聘により来道して、札幌の原始林を切り開いて「真駒内牧牛場」建設に着手したことはじめられます。そして開拓使廃止(1882・明治15年1月)後、町村金弥(1859～1944)がその運営を受け継ぎます。その長男町村敬貴(ひろたか)(1882～1969)が、米国留学・きびしい酪農実習をして帰国した後、本格的な酪農経営に取り組みます。

時代が少し前後しますが、苦労を重ねて酪農業を立ち上げた宇都宮仙太郎(1866～1940)や黒沢西蔵(1885～1982)らの努力があって、後に雪印乳業設立の重要な役割をはたすことになります。黒沢は、1933年(昭和8年)、江別に「酪農義塾」(現在の酪農学園大学)を設立しています。

今回は、こうした「酪農王国」北海道の基礎を築いた先駆者たちの苦労とその業績にスポットをあてて検証してみたいと思います。まず、その前史ともいべき幕末、そして明治の開拓使時代(1869～1882)の農業、牧畜・酪農の歴史をたどることから始まります。

時代背景として 札幌村の開祖 大友亀太郎

江戸幕府は、ロシアの南下に対する蝦夷地警備のために、1854年(安政元年)箱館奉行所を設置します。そして、内陸部開拓のために、二宮尊徳(1787～1856、江戸後期の農政家)一門に協力を要請します。1858年(安政5年)になって、報徳思想を体得した門下生の「大友亀太郎」(1834～1897、当時25歳)が、幕府の命令により蝦夷地に渡ることとなりました。

大友亀太郎は、箱館奉行から開墾場取扱いの辞令を受けて、苦労の末原野を切り開き、道路を作り、用水路を掘って、木古内・大野村・次いで七飯に御手作場(おてさくば・開拓農場)を開設しました。

また、1868年(明治元年)7月、箱館府の99年間祖借地契約による、ガルトネル七重村開墾農場は、開拓使が交渉を重ね、1870年(明治3年)12月、明治政府が莫大な賠償金を支払って取り戻しますが、彼の西洋式農業経営紹介は、道南の農業開拓の基礎となり、その功績は大きいといわれています。

大友亀太郎は、開墾農場開設の業績が高く評価されて、1866年(慶応2年、当時32歳)、蝦夷地開墾掛を命ぜられ、石狩開墾に関する計画書を提出して、4月23日、高木長蔵ら数名とともに石狩に入りました。早山清太郎を案内役として御手作場(おてさくば・開拓農場)をサホロベツ(アイヌ語で大きな

乾いた広い土地という意味)と決定して、伏古川のほとりで開拓に着手したのでした。(これが「札幌村」の原点となりました)。当時、大友亀太郎より先に、発寒には山岡精次郎、篠路には荒井金助、早山清太郎、豊平川両岸には志村鉄一、吉田茂八らが入植していました。

大友亀太郎は、田畑の開墾に先立って、資本を導入して、石狩などから多くの人夫を集めて、豊平川支流から水を引いて、北に水路を掘り進め、現在の南3条から北6条までは直線に(現在の創成川)、そこから東北に曲って北13条東16丁目のところで伏古川に合流するという用水路の大工事を、1866年(慶応2年)5月から始めて、同年9月9日に完成・通水させています。

*これが「大友堀」といわれるもので、堀の大きさは長さ約4km、深さ約1.5m、上幅約1.8m、下幅1.2mという大規模工事で、毎日40~50人の人夫が働く「一万両の大工事」といわれるものでした。完成した「大友堀」は、用水路、運送路として、多目的に利用されましたが、1925年(大正14年)ごろ、北6条から伏古川の間は埋めたてられました。その後、札幌から茨戸までの「寺尾秀次郎堀」と結ばれて、一直線の川筋として今日に至っています。

大友亀太郎は、さらに道路や橋なども作り、翌1867年(慶応3年)4月、箱館近郊から20戸70余人の入植者を迎えて、田畑を開墾し、その年の秋には若干の米も収穫します。こうして、明治以後の札幌開拓の先駆的な役割を果たしたのでした。(後に、札幌官園のエドウィン・ダンなどの指導で各種作物が栽培されます。)

大友亀太郎は、1868年(明治元年)7月、箱館裁判所付属となります。12月石狩当別の土地調査・移民受入れに着手。明治2年(1869)8月、苗穂村を開墾しますが、この年の12月に、元村・苗穂の開墾地を開拓使に引き渡して、翌1870年(明治3年)1月、新しく拝命した開拓使掌を辞して苦難の開拓12年の北海道を去りました。その後の大友亀太郎は、茨城県・島根県・山梨県の要職を経て、1874年(明治7年)故郷神奈川県に帰り、戸長などを務めて、1881年(明治14年)県会議員に当選、以後4期連続当選。1897年(明治30年)12月14日、64歳の生涯を終えています。

開拓使時代のお雇い外国人 ケブロン人脈の指導者たち

さて1869年(明治2年)7月、明治政府の開拓使設置により、北海道の本格的な開拓がスタートしますが、1870年(明治3年)5月、開拓次官となった黒田清隆(1840-1900)は、北海道の開拓や農業経営の模範を米国に求めて、マサチューセッツ州出身の米国農務長官ホールズ・ケブロン(1804-1885、当時67歳)を開拓使顧問として招聘します<この経緯は「HOMAS」43に詳述>。

ケブロン(1871年(明治4)8月25日来日~1875年(明治8)5月23日離日)は、1871年(明治4年)8月、書記兼医師としてジョウジタウン医科大学解剖学助手・合衆国農務省図書館司書をしていたエルドリッジ、科学技術師として工学・地質・鉱学関係担当の技師として合衆国農務省に勤務していたアンチセル、測量・土木関係担当の技師としてバルチモア・オハイオ鉄道に勤務していたワフィールドという優秀なスタッフを伴って、最初の開拓使お雇い外国人として来日します。ケブロンの指導で、早速、東京の青山・赤坂・麻布に官園(農業試験場)が設けられ、北海道に導入する作物の試作・家畜の飼育や農業技術者の養成が行なわれます。(この事業責任者が村橋久成です。)

最初に、アンチセル、ワフィールドの開拓予備調査。そしてケブロン自身の3回にわたる道内各地の長期視察・調査を通してまとめられた「ケブロン報告書」<明治4年(1871)11月、明治6年(1873)11月、明治8年(1875)3月>、さらに離日に際して、「報文要略」を開拓使に提出しています(ケブロンの滞日3年10ヶ月)。これらの、「報文」は、北海道の基本的な開発計画を提言し、札幌を首都とすること、農業開発のために高等教育機関を設置することなどを提言、その後の北海道開拓の重要な指針となります。

*ケブロンは、帰国後はワシントンに在住して静穏な余生を送ったといわれます。1876年(明治9年)には、ワシントン哲学会で「日本」と題する講演をし、また1877年(明治10年)西南戦争に際しては、黒田の要請(黒田は65,000ドルをケブロンに送金)に応じて鉄砲・弾薬の調達をしたり、開拓使からのいろいろな依頼に対応してなお日本に目を向けていたといわれます。晩年のケブロンにとって、日本とのきずなは貴重であったようです。ケブロンは時折、自宅に議員や各省の高官を招いて、日本から持ち帰った美術工芸品を披露するのを楽しみにしていたそうです。ケブロンの人柄は、いつも誠実で奥ゆかしい態度で人に接し、虚飾を廃した質素な生活を好んだといわれます。

1884年(明治17年)1月、日本の天皇から勲二等旭日章が授与されました。ケブロンは、勲章と日本でのケブロンの功績を書き連ねた天皇署名入りの賞状に「深い感動」をおぼえたといわれます。そして、1年後の1885年(明治18年)2月21日、ケブロンはワシントン記念塔完成を祝う式典に出席します。その日はよく晴れていたが、風の冷たい日であったそうです。帰宅後、気分の不調を訴えたケブロンは、その翌日、80歳の生涯を閉じたのでした。

ケブロンは、開拓使顧問在任中は、黒田の信頼もきわめて厚く、職務にたいしては誠実そのものであったといわれます。しかし、ケブロンの指導による北海道開拓事業の成果にたいしては、開拓使官員や内外新聞の批判、多くの優秀な部下たちとのトラブルなどもあって、きびしい評価もあったようです。ケブロンの北海道の総合的な開発の計画・構想は開拓使に対してのみ向けられ、顧問としての職分に徹していたようです。

ケブロン在任中のお雇い外国人の大半は、ケブロンの推薦・承認のもとに採用されたこともあり、多くのアメリカ人技術者が中心となっています。地質・測量・鉱山開発のベンジャミン・S・ライマン > (1835 - 1920) <1873・明6、1、18 来日 ~ 1880・明13、12、22 離日・滞在6年半> 助手マンロー(1872・明5 来日 ~ 後、コロンビア大学 学部長)などがいます。

また、ケブロン帰国後も、札幌農学校関係では、初代教頭・農学・化学・数学のウィリアム・S・クラーク 1826 - 1886) <1876・明9、7、31 来札・当時50歳 ~ 1877・明10、4、16 離札・滞在8ヵ月16日>、土木工学・数学・第2代教頭で、時計台・モデルバーン・豊平橋などを設計したウィリアム・ホイーラー (1851 - 1932) <1876・明9、7、31 来札・当時25歳 ~ 1879・明12、12 帰国・滞在3年半>、化学・農学・数学・第3代教頭で、石鹼・ローソク・マッチ・コークス・魚油などの製造実験をしたディヴィッド・ペンハロー(1851 - 1932) <1876・明9、7、31 来札・当時22歳 ~ 明13、8・滞在4年間>、農学・官園監督・第4代教頭で、丘珠タマネギ・トウモロコシ・カボチャ・トマト・キャベツなどを栽培したウィリアム・ブルックス(1851 - 1938) <1877・明10、2 来日・当時26歳 ~ 明21・滞在10年7ヶ月>、生理学・解剖学・病院医術顧問で札幌の病院施設の充実・学校の身体検査の創始などに努めたジョン・C・カッター(1851 - 1909) <1878・明11、9 来日 ~ 1887・明20、1・滞在8年4ヶ月>。

*カッターの死後1910年、遺言により札幌市に寄付された500ドルをもとに1938年(昭13年)に大通西5丁目の「聖恩碑」四隅にカッターさんの水飲み場が設置されて、今日も使用されています。数学・土木のピーボディー(1878・明11、12 着任 ~ 明14、7 離任)、サマーズ(1880・明13、6 着任 ~ 明15、6 離任)、ストックブリッジ(1885・明18、5 着任 ~ 明22、1 離任)、ヘート(1888・明21、1 着任 ~ 明25・8 離任)、ブリガム(1889・明22、1 着任 ~ 明26、11 離任。 <外国人教師の最後>)など合計10名を迎えています。これら札幌農学校初期の米国マサチューセッツ州出身の教師は、総じて勤勉で献身的に職務以外の仕事にも非常に熱心に取り組み、ほんとうに北海道開拓期の立派な指導者でした。

さらにまた、茅沼・幌内炭鉱のゴージョー、ダウス(2名、1879・明12 来日 ~)、鉄道敷設・土木顧問のジョセフ・クロフォード(1878・明11 来日 ~)、水産加工・魚肉缶詰製造のトリート(1877・明10 来日 ~)

などが招かれており、ケブロンを筆頭に、合計 78 名の「お雇い外国人」中、48 名がアメリカ人でした。

北海道牧畜酪農の指導者 エドウィン・ダン

ケブロンが進言により、まず、1873 年(明治 6 年)7 月、オハイオ州で牧場経営をしていたエドウィン・ダン(1848～1931)が、A・B・ケブロン(ホーレス・ケブロンの子)の依頼を受けて、米国の進んだ畜産技術指導のために、牛 20 頭・羊 100 頭とともに大陸横断の苦難の未来日します。早速、東京麻布の第 3 官園で約 30 人の生徒に実技指導を行い、北海道開拓に役立つ技術者養成のために実技を主体にした畑作や畜産の技術を幅広く指導します。

ダンは、1875 年(明治 8 年 5 月、北海道「七重官園」(現在の七飯)に、5 ヶ月の長期出張で来道、農業技術や馬の改良に欠かせない去勢技術の普及に努めます。この期間中、札幌官園、新冠牧場も視察しました。また七重では「妻となるべき女性」ツルにも出会いました。後に、国際結婚の難しい手続きを経て、正式に結婚。日本永住の決意を固めたのでした。

1876 年(明治 9 年)6 月、ダンは、園芸担当のポーマーと共に「札幌官園」に転勤し、直ちに真駒内牧牛場の建設に着手、搾乳場・乳製品加工場・用水路など、酪農・牧場の基礎が整備されていきました。

とりわけ、エドウィン・ダンが完成させた「真駒内用水路」(～明 12 年・1879 年完成)は、真駒内川から取水され、現在の中央公園の池を通り、緑町、曙公園から陸上自衛隊駐屯地を通り、精進川に注ぐ約 4km に及ぶ灌漑用水で、家畜の飲料水・農業用水・水車などにも利用され、真駒内牧牛場地域だけでなく、後には広く、平岸・豊平・白石など広域に用水を供給してきた歴史をもっています。これは北の「創成川」<「大友堀」(慶応 2 年)・「吉田堀」(明 3)・「寺尾堀」(明 3)の総称>に匹敵する歴史的価値のあるものです。

*1876 年(明治 9 年)7 月 31 日、マサチューセッツ州立農科大学学長ウィリアム・S・クラーク(1826-1886)が、ウィリアム・ホイラー、ディビッド・ベンハローとともに札幌着任。8 月 14 日、札幌農業校開校、初代教頭(学長)となります。これに伴い札幌官園の大半が農学校の農場となったこともあり、エドウィン・ダンも、彼等と協力して、明治 10 年(1877)我が国最初の模範家畜房(モデルバーン)を建築しました。これは、今日も北大構内に、重要文化財として保存されています。

明治 10 年(1877)ころには、真駒内の牛舎には牛 107 頭、馬は農耕用・乗馬用あわせて 10 数頭、豚も 40 頭くらいいたそうです。当時のエドウィン・ダンは、本府近くの虻田通り(現在の中央区北 4 西 2)の官舎に妻ツル・長女ヘレン(明 10 生)と住み、毎日真駒内牧牛場に通っていました。

1878 年(明治 11 年)、ダンの提言により「新冠牧馬場」が整備され、馬産王国北海道の基礎ができたのでした。馬の改良と増殖が進められ、開拓使が米国農法を模範として、馬を使用する農機具の導入を図ったこともあり、馬による大型機械が普及して、北海道の大規模農業の発展に大きく貢献しました。また、ビール製造用の大麦・小麦・亜麻の栽培等、暗渠排水による土地改良なども、ダンの指導によるところ大であったといわれます。(今日も、多くの農機具は、プラウ・ハロー・ホークなど英語名で呼ばれています。また、バター・チーズの製造、ハム・ソーセージの加工、ミルクなどの普及もここからはじまります。)

1882 年(明 15)1 月、開拓使の廃止により真駒内牧牛場は農商務省の所管となります。エドウィン・ダンは、この年 12 月、6 年半にわたる北海道滞在に多くの業績を残して、家族と一緒に東京に移りました。この年、札幌農学校 2 期生の「町村金弥」(1859 - 1944)が真駒内牧牛場に勤務して、短期間ではありましたが、ダンの直接指導を受け、その技術を実地に受け継いだ最初の人となります。札幌農学校の卒業生からは、新冠御料牧場に 1 期生の黒岩四方進が入って、北海道の馬産に貢献し、また、2 期生の南鷹次郎(1859 - 1936、北海道帝大初代農学部長・後第 2 代学長)は、札幌農学校園の経営

にあたり、多くの指導者を養成し、北海道農業全般の発展に大きく貢献しています。

* その後のダンは、明治 16 年(1883)、長年にわたる北海道農業・畜産指導の功績により勲五等旭日双光章を受章。米国オハイオ州に一時帰国しますが、1884 年(明治 17 年)、駐日米国公使館の二等書記官として再来日、1897 年(明治 30 年)まで外交官として勤務。後、石油採掘事業を起こし、1912 年(大正元年)三菱会社勤務。1931 年(昭和 6 年)5 月 15 日、東京代々木の自宅で永眠しました。(享年 83 歳)

ダンの薫陶を受けた町村金弥

1882 年の(明治 15 年)1 月、開拓使の廃止により真駒内牧牛場は農商務省の所管<後に「真駒内種畜場」(明 19)、「北海道種畜場」(明 26)と改称>となります。この年、札幌農学校 2 期生の「町村金弥」(1859 - 1944)が真駒内牧牛場勤務となり、エドウィン・ダンがこの年 12 月札幌を離れるまでの短期間でしたが、ダンの直接指導を受けたのでした。エドウィン・ダンの牧牛場からはじまった真駒内の開拓は、肥沃な土地に恵まれたこともあり、地域の人々の野菜・果物作り、また種畜場に納める牧草や根菜類の耕作も広まっています。

町村金弥(1859-1944)は、1859 年(安政 6 年)1 月、越前国南条郡武生(現福井県武生市)生。12 歳の時上京して、同郷の日本橋の蚊帳問屋奉公しながら苦学力行、東京英語学校で英語を学び、1977 年(明 10)、工部大学校予備校(東大工学部前身)に合格しますが、同年、官費生募集の札幌農学校を受験して、2 期生として入学して、畜産学を専攻します。札幌農学校 2 期生 18 名には、宮部金吾・太田稲造(のちの新渡戸稲造)・内村鑑三、築港工事権威者となる広井勇、第 2 代北海道帝国大総長の南鷹次郎、十勝農業の基礎をつくった諏訪鹿三などがいました。

金弥は、在学時代、ブルックスの農学の講義とアメリカ式大農経営、さらにダンの指導も受けて欧米式大農場の経営法を学んでいます。1881 年(明 14)7 月卒業すると同時に開拓使御用掛に採用され、真駒内牧牛場の担当となり、短期間ですがダンの精力的な指導を受け、翌 1882 年(明 15)には真駒内牧牛場長(農商務省管轄)になります。この年 2 月開拓使は廃止となり、ダンは職を解かれて札幌を去ります。金弥は、真駒内牧牛場が、1886 年(明 19)北海道庁管轄「真駒内種畜場」になるまでの 5 年間勤めています。金弥は本庁に戻りますが、その後、北越殖民社、雨竜華族農場の指導、十勝開墾合資会社などの大農場の経営指導にも当たっています。北海道庁の指導を受けて、1887 年(明 20)北海道製麻株式会社の雁木農場や、1888 年(明 21)北海道製糖株式会社の野幌農場設計・指導にも当たっています。事業家を招いて北海道開拓を推進、欧米農法・酪農畜産の技術指導に功績を残しています。1901 年(明 34)陸軍技師となり、馬の飼育改良に貢献します。晩年は、東京の大久保に在住、10 年間町長を務めています。最後は、疎開先の郷里武生で 1944 年(昭 19)没、86 歳の生涯でした。

このように、金弥は、多くの大牧場開設経営の指導に当たっていますが、最も大きな功績は、後に北海道の酪農界を代表する、「宇都宮牧場」の宇都宮仙太郎と「町村牧場」の町村敬貴の二人を養成したことだといわれます。

宇都宮は大分県中津の出身。1885 年(明 18)、金弥が、牧畜を志して真駒内牧牛場を訪れた宇都宮熱意にほだされて採用、アメリカ修行、牧場独立などの援助をします。また、長男敬貴も、札幌農学校卒業後、宇都宮の世話でアメリカへ酪農修行に送り出します。敬貴が 10 年間修行して帰国したとき、金弥は、樽岸農場の牧草地に独立の足場を与えています。敬貴は、その後江別に移り、模範的農場経営に成功して、わが国屈指のブリーダーとして活躍するにいたります。この二人を世に送り出した、金弥の先見の明と深慮・援助は高く評価されるべきものといえます。

宇都宮仙太郎

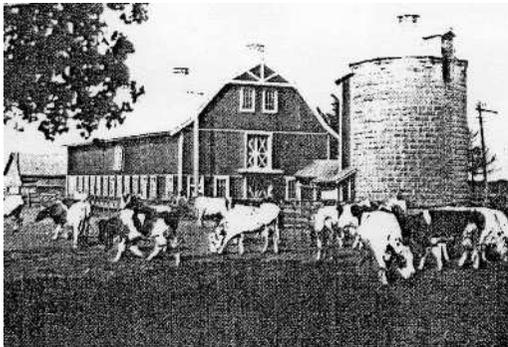
北海道の酪農業の基礎は、エドウィン・ダンや町村金弥などによって固められました。しかしなが

ら、まだ、牛乳や乳製品の一般的な需要が少なく、本道乳業者は苦境に立たされていました。この新しい産業第1のパイオニアが宇都宮仙太郎(1866-1940)といわれます。

宇都宮仙太郎(1866~1940)は、1866年(慶応2年)4月14日、大分県下毛郡大幡村(現中津市)に、父武原文平の次男として生れますが、母方の家を継いで宇都宮を名のります。地元の中学校卒業後、志を立てて上京し、神田の共立学校(高橋是清校長)に入学します。下宿屋近くの牛乳屋の主人がいつも「身体を丈夫にするには何よりも牛乳が一番」という宣伝を聞きその言葉を信じたという。仙太郎は、慶応義塾の同郷中津藩出身者福沢諭吉の感化を強く受け、1885年(明18)8月、20歳の時、牧畜業経営の希望をいいて北海道行きを決意したのでした。

当時、エドウィン・ダンが設立した真駒内牧牛場(後、「真駒内種畜場」に改称)は全国的に有名で、牧場長は町村金弥でした。金弥は、仙太郎の尋常一様でない熱意をみこんで、あまり丈夫でもなさそうな若者を、牧夫見習いとして日給20銭で採用したのでした。仙太郎は、すぐに熱心な働き手となりますが、1887年(明20)4月、金弥の手引きにより、あこがれのアメリカ牧畜業研究のため渡米します。最初は、放浪者のような生活の末、ワシントン州のデビス牧場を振り出しに各地の牧場で実習を積み、最後はイリノイ州のガラー牧場でした。ついで Wisconsin 州農事試験場の実習生となり、州立農科大学のショ-トコースに学び、1890年(明23)3月帰国します。

仙太郎は、しばらく金弥の農場で働きますが、1891年(明24)9月、金弥からホルスタイン2頭を借り受けて独立し、元札幌農学校長森源三の土地(現知事公館の西北角)を借りて、市乳の配達販売を開始。残りの牛乳はバターにして豊平館に収めたのでした。これが北海道酪農史上、民間のバター製造販売の最初といわれます。仙太郎は一時上京して、牛乳販売をしますが東京進出はうまくいかず、1898年(明31)9月再び札幌にもどって、「札幌バター」の製造に取り組みます。



上白石にあった宇都宮牧場(1922年・大11頃)



上野幌の宇納姁牧場(1927年・昭2頃) 現雪印種苗センター

1902年(明35)5月、上白石に土地20町歩を購入して、牛舎を新築、大型のサイロも建て、ホルスタイン種20余頭を飼って、牛乳販売・バター製造などを開始します。以後25年間「宇都宮牧場」の本格的な酪農経営に当たります。民間人初の種牛輸入による品種改良、共同組合方式の資材調達、本格的なバター製造など、日本近代酪農の基礎を築いたのでした。仙太郎は全国から募って集まってくる後継者を育て「日本酪農の父」と呼ばれ、アメリカに留学してホルスタインの品種改良に務めた長男の勤は、「日本ホルスタインの父」といわれました。

1905年(明38)7月31日、後の酪農学園創立者となる黒沢西蔵19歳が、当時の札幌区長阿部宇之八の紹介を受けて、この宇都宮牧場を訪ね、牧夫としての第一歩を踏み出します。西蔵は、仙太郎

の説く“酪農三徳”「牛飼いは三徳がある。第一に役人に頭を下げなくてもよい。第二に牛には嘘をつかなくてもよい。第三には牛乳が飲める。牛乳は人を健康にする。」という言葉に心酔したといわれます。この宇都宮牧場には、多くの若者が集まってきました。その中に、小学校4年生の佐藤貢（後、雪印乳業初代社長）もいました。これは、父佐藤善七（道庁役人・後札幌信用金庫理事長）が、仙太郎の真剣な働きぶりに感銘をうけて息子を修行のために送り込んだといわれます。

1906年（明36）、40歳の仙太郎は、再び渡米して、同業者の協力も得てホルスタイン牛50頭を買い付けます。これが、後の北海道はもとより、広く日本全国の酪農業を大きく向上させる「基準牛」になったといわれています。

1915年（大4）、市乳業者が結集して札幌牛乳販売組合（後の[札幌酪農組合]）をつくり、仙太郎が会長に選ばれます。1921年（大10）、第16代北海道長官宮尾瞬治が、道の方針として酪農振興を取り上げ、デンマーク農法を導入することとなり、北海道の酪農業は、ますます発展していきます。

1924年（大13）宇都宮牧場を上白石から上野幌に移転。デンマーク留学帰りの出納場一と「宇納農場」を開きます。そして、アメリカオハイオ州立大に留学していた佐藤貢を工場技師に迎えて、バター・チーズの本格的製造を開始。乳価問題など多方面の問題に対応していくこととなります。これが、後に「雪印乳業」と名を変えて、牛乳・バター・チーズなどの製造販売で、日本の食生活を大きく変化させることとなります。

1925年（大14）5月、全道の酪農家629人が結集して「北海道製酪販売組合」（雪印乳業の前身）が発足。組合長には、最も信頼厚い59歳の宇都宮仙太郎が就任したのです。その後、全道に工場を設け、さらに市乳やアイスクリームなど多方面の製品を出し、次第に大企業体に成長していきました。仙太郎はそんな多忙な中であっても、長男の勤に種牛を輸入させて、優良なホルスタイン牛の飼育・普及を大事にしていました。国内の品評会では他の追隨をゆるさず、優勝をかさねています。

1934年（昭9）6月7日、仙太郎は、畜産指導講習会で、北海道における家畜飼料について講義中、突然脳溢血で倒れたのです。その後回復はしますが、1940年（昭15）3月1日逝去。74歳の生涯でした。勲6等瑞宝章を授与されています。

札幌村の開祖 大友亀太郎(1834～1897)を記念するもの

「大友亀太郎像」(札幌市中央区北2条西1丁目)

昭和61年(1986)5月、農民彫刻家松田与一氏(上川管内東川町)制作による「大友亀太郎像」が、昔、「大友掘」と呼ばれた創成川沿に建てられています。詳しい歴史説明の石版もあります。創成川通大規模工事(2005 - 2011)の期間、札幌村郷土記念館前に移設。復元後、札幌村郷土記念館保存会により、郷土記念館前にも、東区役所ロビー像を複製した「大友亀太郎像」が、新たに建立(2011,11)されています。

「札幌村郷土記念館」(札幌市東区北13条東16丁目2-6)

昭和52年(1979)4月、地域の人々によって、大友亀太郎の札幌開拓の先駆的事業に関する資料、わが国の「玉ねぎ」栽培の先進地としての歴史的資料などを保存する資料館として開設されました。昭和62年(1987)2月札幌市有形文化財指定。記念館の敷地は、大友亀太郎役宅跡として史跡に指定されています。入館無料10時～16時。(月曜日と祝日の翌日、年末年始は休館です)

「大友公園」(札幌市東区北13条東16丁目3)

昭和42年(1967)、札幌市が土地区画整理事業により、この地に公園を設置しました。その際、厳しい北国の自然と闘い、遠大な理想をもって開拓を進めた先人の偉業を偲ぶ記念公園として、「大友公園」と名付けられました。当時の歴史再発見の広場となっています。詳しい歴史説明板があります。

日本畜産の指導者 エドウィン・ダン(1848～1931)を記念するもの

「エドウィン・ダン像」(七飯町庁舎内)(札幌市南区真駒内泉町1-6 真駒内中央公園内)

1962年(昭37)設立「エドウィン・ダン顕彰会」(会長町村敬貴)により、ダンの銅像・記念館の建設、「エドウィン・ダン日本における半世紀の回想」(高倉新一郎編・昭37刊)の出版などが計画されます。この銅像は、彫刻家峯 孝氏の制作により、昭和39年に建てられたものですが、明治初期に、ダンが畜産指導にあたった七飯官園と真駒内牧牛場との両地にあります。

「エドウィン・ダン記念館」(札幌市南区真駒内泉町1-6 真駒内中央公園内)

エドウィン・ダン(1848～1931)の指導により、明治9年(1876)から建設に着手、真駒内牧牛場の施設が整備されて、本格的な酪農畜産がスタートしました。明治26年(1893)には、北海道種畜場になり、名実ともに、北海道の家畜改良や技術普及のセンターとしての役割を果たしてきました。しかし戦後、米軍が接収されたため、一時新得町に移転しました。その後、この由緒ある建物をぜひ残したいということになり、昭和39年10月、「エドウィン・ダン顕彰会」により、現在地に移設され、関係資料を展示することになったものです。

この記念館は、昭和40年から、一木万寿三画伯によるダンの生涯と業績を描いた絵画を中心に、北海道の開拓初期の写真、種畜場の模型などを展示しており、平成12年に、国の登録有形文化財に指定されました。建物は昭和40年、札幌市に移管され運営されていましたが、老朽化のため約8,000万円をかけて本格的な改修工事を行い、平成15年5月リニューアルオープンを機に、地元住民「エドウィン・ダン記念館運営委員会」により運営されています。入館無料・9時30分～16時30分。(毎週水曜日休館：11月4日～翌4月末日は閉館)

日本酪農の父 宇都宮仙太郎(1866 - 1940)を記念するもの

「日本近代酪農発祥の地」碑(札幌市白石区菊水1条3丁目、現在菊水やよい会館前)

1902年(明35)～1927年(昭2)の25年間、20ヘクタールの宇都宮牧場(写真7頁)があり、サイロなどをもつ本格的な牧場で、ホルスタイン20余頭を飼育、牛乳販売・バター製造など、日本近代酪農の基礎を築きます。

「宇納農場」(札幌市厚別区上野幌1条5丁目1-6、現在雪印種苗園芸センター敷地)

1924年(大13)、もともと「出納農場」を、宇都宮仙太郎が参画して、デンマーク留学帰国の出納場と共同で「宇納農場」として開設。バター工場を造り本格的に製造を行う。現在は、○雪印乳業の前身・北海道酪農販売組合が1925年(大14)宇納農場の製酪所を借りてバター製造を開始した「雪印バター誕生の記念館」、○「酪聯発祥の地」碑(1958年・昭33建立、黒沢西蔵書)、○マンサード屋根の美しい「出納邸」(出納場一氏邸宅、1925・大14建)、○札幌軟石のサイロ、などが保存されています。

あとがき

この「北海道開拓の基礎を築いた指導者たち」シリーズの原稿執筆にあたり、北海道近代化の歴史が、いかにアメリカの深い影響下に発展してきたかと驚きを新たにしています。開拓使設置、黒田清隆によるホーレス・ケブロンをはじめとする多くのアメリカ人指導者の招聘・・・今回の北海道酪農業の分野においても、エドウィン・ダンというすばらしい「アメリカ人」指導者なくしては、その後の道筋はできなかったでしょう。毎回資料を読みながら感動しています。(執筆担当：中垣正史)

<主な参考文献及び参考資料>

「北海道酪農百年史 足跡と現状及び人物誌」木村勝太郎著 樹村房 1985 「ほっかいどう百年物語」STVラジオ編 中西出版 「札幌百年の人びと」札幌市史編さん委員会編 札幌市発行 「ひらけゆく大地(下) 開拓につくしたひとびと」第四巻 北海道総務部文書課編集 理論社刊 「のびゆく北海道(下) 開拓につくしたひとびと」6 北海道総務部文書課編集 北海道発行 「北海道牛づくり百二十五年 町村敬貴と町村牧場」蝦名賢造著 株西田書店 「私の履歴書 - 21 - 町村敬貴」日本経済新聞社編集・発行 「町村敬貴伝」蝦名賢造著 町村敬貴記念事業の会発行 「宇都宮仙太郎」黒沢西蔵著 酪農学園出版部発行 「牛飼いからの伝言 黒沢西蔵の生涯」仙北富志和著(非売品) 各地の現地リサーチ資料 インターネット資料など

平成24年度 第1回 国際交流ランチセミナー記録

～ アメリカ各州(7州)の先生方14名を迎えての昼食交流会 ～

日時 平成24年7月8日(日) 11時00分～14時00

会場 北大構内 レストラン「エルム」(札幌市北区北11条西8丁目)

<ゲスト> Five College Center for East Asian Studies, 2012 Tour Program Participants

1 Ms. Karen Doolittle	Vestal Senior High School	Endicott, New York
2 Ms. Veronica Gelormino	Torrington Middle School	Torrington, Connecticut
3 Ms. Erika Guckenberger	McCall Middle School	Malden, Massachusetts
4 Ms. Beth Maiorani	Cobbles Elementary School	Penfield, New York
5 Ms. Susan Murphy	Alan Shawn Feinstein Middle School	Coventry, Rhode Island
6 Ms. Laura Musser	Peak to Peak Charter High School	Wheat Ridge, Colorado
7 Mr. Matthew Sudnik	Central Catholic High School	Pittsburgh, Pennsylvania
8 Mr. Paul Swanson	Harmony(High) School	Bloomington, Indiana
9 Ms. Benayshe-Ba-Equay Titus	Voyager Middle School	Everett, Washington
10 Ms. Sarah Wilson	Snowden International(High)School	Boston, Massachusetts
11 Ms. Anne Zachary	Ottoson Middle School	Arlington, Massachusetts
12 Ms. Sally Zuniga	Student Empowerment Academy High School	Los Angeles, California
13 Ms. Anne Prescott	Study Tour Leader Director,, Five College Center for East Asian Studies	
14 Mr. Greg Diehl	Study Tour Assistant	(Office: Smith College)
15 Ms. Jessica Jensen	High School Exchange Student	From New Zealand
16 Ms. Melanie Yamazaki	English Instructor	live in Eniwa city
Sean (child)		

概要: この国際交流ランチセミナーは、2001年(平成13年)から、広く多国籍の外国人をゲストとしてお招きして、国際交流や異文化理解の楽しい時間を共有しています。今回は、ファイブカレッジセンター東アジア研究プログラムの先生グループ14名+2名をゲストとしてお迎えしました。このセミナーは、今回で33回目です。参加者は、合計55名でした(通訳は、会員の山崎 秀樹さんにお願ひしました。)ここには、ゲスト数名の挨拶スピーチの概要をご紹介します。

1 マシュー・サドニック(男性・ピッツバーグ・ペンシルバニア)

私は、初めて北海道に来ましたが、大変温かい歓迎をうけて感激しています。ありがとうございます。私の勤務している学校は、カトリック系の男子のみの中学・高校です。様々な地域にある100校以上の小学校から生徒が来ます。非常に様々な背景をもった生徒がやってきますが、私はそんな彼らを迎える1年生の担任をしています。またこの学校は外観がユニークです。非常に大きな城のような校舎で迫力があります。日本の学校とはずいぶん違います。今日は、楽しい時間を過ごしています。

2 ベス・マイオラニ(女性・エンディコット・ニューヨーク州)

札幌の皆さんはとても温かく歓迎してくださり、ありがとうございます。特にホストファミリーの皆さんは大変親切で、初めて札幌に来ましたが、とても楽しく時間を過ごさせていただいています。昨夜は、藻岩山のロープウェイに行き、360度のパノラマで札幌の夜景を楽しみました、大変素晴らしいかったです。私はニューヨーク州の北部に住んでいますが、北海道にとっても気候が似ています。針葉樹が多く、年中緑が濃く、自然が非常に美しい場所で、北海道にいると故郷を思い出します。

3 ローラ・マッサー(ウィートリッジ・コロラド州)

私はコロラド州のウィートリッジ高校に勤務しています。コロラド州は中西部に位置しており、ロッキー山脈もあり夏も涼しく、冬は雪が降ります。ちょうど北海道と似ていると感じています。皆

さんと同じように、私も札幌に来ることが出来るとても良かったと思っています。温かい歓迎を受け、皆さんと楽しい時間を過ごすことが出来たことに感謝いたします。私は社会科を担当していますが、アメリカでは東アジアについて授業で触れることがあまりなく、残念に思っています。今回このプログラムで得た経験や文化体験が、地図や教科書に書かれてある以上の事を生徒に直接伝えるきっかけになればと思っています。今日は、ありがとうございます。

4 アン・ザカリー (アーリントン・マサチューセッツ州)

私はマサチューセッツ州のアーリントンで中学校の教員をしています。アーリントンはボストンの近くにありますが、長岡京市と姉妹都市提携を結んでおり、ちょうどこの時期にアーリントンから派遣団が来ています。残念ながら、私はそのメンバーではありませんが、今頃長岡京市でもよい交流がなされていることと思います。今回の札幌滞在は、北海道・マサチューセッツ協会のご協力とご支援で可能になったとっております。マサチューセッツ州に住む者として代表してお礼申し上げます。本当に感謝しています。

5 グレッグ・ディエル(ファイブカレッジセンター・アシスタント・マサチューセッツ州)

突然のご指名で、何も用意していませんでしたが、今回私たちの一行を歓迎していただき、心より感謝申し上げます。特に北海道・マサチューセッツ協会の皆様、ホストファミリーの皆様ののおかげで非常に良い経験をさせていただいています。私の札幌滞在は、実は2回目ですが、前回は真冬に訪問で、非常に寒く雪が多くて大変でした。今回は夏の訪問ですので、とても快適でした。

6 アン・プレスコット(ファイブカレッジセンター・ツアーリーダー マサチューセッツ州)

ファイブカレッジセンターと今回の訪問団を代表しまして、札幌の皆様・ホストファミリーの皆様・そして北海道・マサチューセッツ協会の皆様に、重ねて厚くお礼申し上げます。今回の札幌訪問の実現を非常に嬉しく思っております。私自身、8年間京都に滞在しましたが、札幌訪問は、はじめてで、非常にうれしく思っています。昨年は東日本大震災後ということで、日本訪問が実現できませんでしたので、今年実現できたことで、喜びもひとしおです。ありがとうございます。



2012 マサチューセッツ州からの訪問団との国際交流事業

コンコードカーライル高校グループの概要

<2012,4,14(土) ~ 18(水) 生徒23名+先生5名=28名>

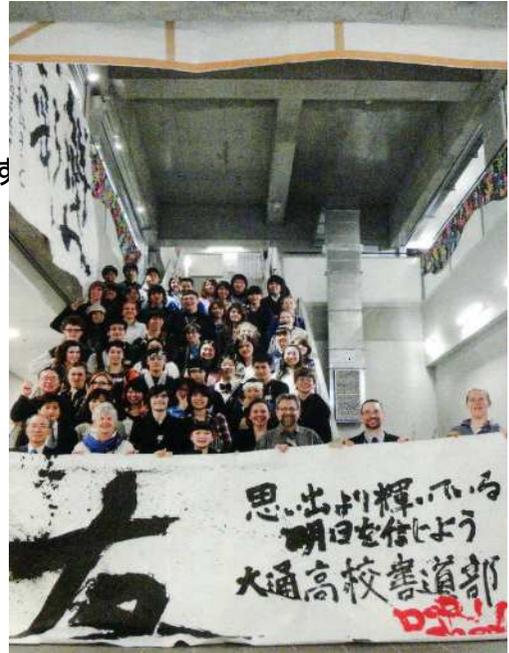
- 4月14日(土) 七飯町 ~登別~札幌へ
夕方 札幌着 札幌国際ユースホステル(豊平区豊平6条6丁目5-35)
18:00 ホストファミリーと面会(挨拶) ホームステイ泊
- 4月15日(日) 終日 ホストファミリーと ホームステイ泊
- 4月16日(月) 8:00 ホストファミリー送り (札幌国際ユースホステル)
9:00 札幌時計台見学(岡本館長歓迎挨拶・英語ガイド説明)(~9:45)
10:00~ 富原亮道議会議員表敬訪問(道議会場見学) (~10:00)
10:30 赤れんが庁舎見学(英語通訳ガイド2名) (~11:30)
12:00 さっぽろテレビ塔見学 札幌国際ユースホステル(昼食)
16:30 <移動>
17:30 国際交流夕食会(ツキサップじんぎすかんクラブ) <参加者73名>
<豊平区月寒東3-11八紘学園農場内> <ユースホステル泊>
- 4月17日(火) 10:00 札幌マンガ・アニメ学院(北大通9丁目)(昼食交流会)
14:00 札幌大通高等学校訪問(北2条西11丁目)(~17:00?)
17:30 札幌国際ユースホステル <ユースホステル泊>
- 4月18日(水) 5:30 バス出発(新千歳空港 大阪 京都へ)



道庁赤れんが庁舎前にて



札幌マンガ・アニメ学院にて



札幌大通高校訪問

ノーブルズ高校短期交換留学グループの概要

< 2012,6,15(金)~7,1(日) 17日間 生徒12名+引率教師2名=14名 >

- 6月15日(金) 20:20 新千歳空港着(JL3049) 生徒：札幌国際情報高校叔トファミリー出迎え
引率教師：ホテルサッポロメッツ泊<北17条西6丁目>
- 6月17日(日) 札幌国際情報高校バスツアー(開拓の村、羊ヶ丘展望台、札幌ドーム野球観戦)
- 6月18日(月) 札幌国際情報高校短期交換留学登校開始~2週間<~6月29日(金)>
- 6月19日(火) 午後校外研修 人形浄瑠璃教室(やまびこ座) <北27条東15丁目>
- 6月21日(木) 全日校外研修(JR札幌駅周辺)
- 6月22日(金) 午後校外研修(赤れんが庁舎、時計台、テレビ塔、大通り公園、狸小路など)
- 6月23日(土) 全日校外研修 三角山~大倉山縦走登山と国際交流昼食会 <参加者30名>
- 6月29日(金) 午後 小学校訪問(新川小学校5年生との文化交流)
- 7月1日(日)~11:20 新千歳空港発(JL2508) 京都~宇治・伏見~
広島・宮島~富士山~大相撲名古屋~東京
- 7月10日(火) 11:30 成田空港発(JL8) 11:30 ローガン空港着(ボストン)



「やまびこ座」人形浄瑠璃教室風景



三角山～大倉山縦走登山後：大倉山ジャンプ競技場前にて

ファイブカレッジセンター教育視察団の概要

< 2012,7,4(水)～10(火) アメリカ各州(7州)の先生方12名+2名=合計14名 >

7月4日(水) 東京駅発(7:32) JR札幌駅到着(17:29) (夕食)

ホテルサッポロメッツ泊(北区北17条西5丁目)

HOTEL泊

7月5日(木) 9:00 札幌日程オリエンテーション(中垣)

- 9:30 北海道大学キャンパス歴史見学(モデルバーン、総合博物館、
新渡戸稲造胸像、クラーク博士胸像など)
- 13:00 札幌大通高等学校視察訪問 16:00 札幌ドーム見学
- 17:00 「ツキサップじんぎすかんクラブ」(夕食) HOTEL 泊
- 7月6日(金) 9:00 赤れんが庁舎見学(英語ガイド) 10:00 北海道庁表敬訪問



道庁赤れんが庁舎前にて

- 11:30 札幌市アイヌ文化交流センター「サップロピリカコタン」訪問
<貸切バス(11:30 - 16:00)> <昼食弁当>
- 13:30 「アイヌ文化レクチャー」とピリカコタン博物館見学
講義「日本の先住民族アイヌの歴史と文化について」(英語)
(北大アイヌ先住民研究センター：丹菊逸治准教授)
- 17:00 ホストファミリー面会 ホームステイ(1泊目)
- 7月7日(土) ホストファミリーと(終日) ホームステイ(2泊目)
- 7月8日(日) ~10:00 ホームステイ ホテルに戻る
- 11:00 「国際交流ランチセミナー」(11:00~14:00) <参加者 55名>
(会場：北大構内レストラン「エルム」) HOTEL 泊
- 7月9日(月) 9:00 (バス出発~9:30) <貸切バス(9:30 - 14:00)>
- 10:00 札幌私立山鼻中学校視察訪問<生徒と一緒に昼食(給食)>
- 15:00 札幌時計台歴史見学(英語ガイド)
- 17:00 大通周辺観光とショッピング (夕食) HOTEL 泊
- 7月10日(火) 7:00 札幌駅発(特急スーパ-北斗2号) 東京駅着(17:56) 横浜へ

7月14日(土)～17日(水) 京都祇園祭 - (宵山) (山鉾巡行)(神輿渡御)
7月26日(木) ~ 広島 ~ 那覇 ~ 帰国



サッポロピリカコタンにて：全員アイヌ民族衣装を着る

「ケビンさん1周忌の集い」のご案内

リチャード・ケビン・スチュワート氏(1962 - 2011)は、1987年8月、JETプログラムで来道して、2年間北海道庁国際課の「初代国際交流員」として活躍され、また、“Japan Society of Boston”の事務局長として、長年北海道との親善交流の推進に尽力されました。しかし、2011年10月1日マサチューセッツ州ウースター市の病院で、脳腫瘍のため49歳の若さで逝去されました。親日家として道内外に多くの知己を得られたケビンさんの1周忌にあたり、思い出を語り合う会を開催したくご案内申し上げます。皆様のご参加をお待ちしています。



記

日時 平成24年10月1日(月) 18:30～20:30

会場 愛生館ビル内 会議室(札幌市中央区南1条西5丁目：地下鉄「大通駅」1番出口2分)

会費 2,000円

*恐れ入りますが、9月25日(火)までに、電話またはEメールにてご参加の連絡をお願いいたします。(連絡先)森田 浩 TEL 090-2056-6774 Email: himorita@hotmail.com

*「ケビンさんを偲ぶ会」発起人

秋山 孝二(公財 秋山記念生命科学振興技術財団 理事長)

木本 憲彦(北海道環境生活部くらし安全局男女平等参画担当課長)

森田 浩(有限会社 エムズ・インテレクト 代表取締役)

事務局短信

平成24年度 理事会 総会 及び ミニコンサート 実施

平成24年4月25日(水)午後、KKRホテル札幌 3階会議室「エルム」で、今年度理事会総会を開催しました。

森本会長の開会挨拶、続いて、ジョン・リース在札幌米国総領事館総領事および高田 久北海道知事室長の祝辞をいただきました。これまでの交流の実績を振り返り、今後の国際交流への期待をこめたお話をいただきました。理事会 総会は、平成23年度事業報告・一般会計決算報告、平成24年度事業計画・一般会計予算書、役員選出などが承認されました。予算がきわめてきびしい状況にあり、一層の経費節減と事業縮小を強いられています。今回は、山田流箏曲演奏(合奏)・橋本賀寿井さんのミニコンサートを開催して、大変好評でした。詳細は、HPでも公表しています。



(ミニコンサート写真：前列左から、松江副会長、森本会長、ジョン・リース総領事、高田久知事室長)

今年度 マサチューセッツ州からの訪問団来札について (概要は本誌でご紹介してあります)

- 1) コンコードカーライル高校グループ (28名)
- 2) ノーブルズ高校グループ (14名)
- 3) ファイブカレッジセンター北海道教育視察団グループ (14名)

スー・ルート マサチューセッツ北海道協会会長来札 (5月5日~7日)

マサチューセッツ北海道協会のスー・ルート会長が来札しました。北海道国際交流・協力総合センター(高橋 了専務理事)、在札幌米国総領事館(ジョン・リース総領事)、北海学園(森本 正夫理事長)、北海道庁(高井 修副知事)の表敬訪問をご案内同行しました。



また、北広島市教育委員会のご案内による、クラーク博士の「Boys be ambitious」で有名な島松の記念碑と「旧島松島松駅通所」の見学。そしてちょうど桜が満開の北海道神宮境内の散策。さらに、札幌で一番古いジンギスカンレストラン「ツキサップじんぎすかんクラブ」もご案内しました。いつも多忙なスケジュールで来道のため、いずれもはじめてということで喜んでいただきました。今後とも北海道とマサチューセッツ州の交流にご尽力いただけることと期待しています。

(写真は島松の記念碑：スー・ルート会長と中垣事務局長)

新入会員紹介 (2012年3月15日~)：敬称略

<個人会員> 宮川 咲乃 明楽 みゆき 高橋 桂子 上田 翼 永田 翔馬

事務局からのお詫びです

「HOMAS」66号の発行が遅れたことを、お詫びいたします。実は、6月末から約7週間、長期入院のため、仕事がすべてストップしていました。8月下旬に退院しまして、少しずつ仕事を再開して、今回の編集・発行にこぎつけた次第です。発行日付は、そのままとさせていただきます。<編集発行責任者：中垣 正史>

